

西澤治彦・河合洋尚編

フィールドワーク

——中国という現場、人類学という実践

風響社／2017年6月／552頁／3600円＋税



宮脇千絵

本書は、中国におけるフィールドワークに焦点を当て、「老壮青」世代の総勢二六名が自身の経験に基づきながら、フィールドワークとは何か、中国という隣人かつ大国を人類学的に理解することほどのようなことなのかという問いに取り組んだ意欲的な著作である。

この本が編まれた背景には、中国が外国人研究者に門戸を開きはじめて一九八〇年代から三〇年余りが経ち、個々人の経験を持ち寄って議論を交わす土壌が円熟したことがあるのだろう。編者である西澤と河合は「あとがき」で、中国研究者の集まりである「仙人の会」が二〇一一年に三〇周年を迎えたこと、東アジア人類学研究会で、中国のフィールドワークを巡る座談会を二〇一四年に二度開催したことが、本書の契機となったと述べている（五二七―五二八頁）。

本書の問題意識は二つある。ひとつは、「中国でどのようにフィールドを展開するか」というフィールドワークの技術的、実践的な側面である。もうひとつは、「フィールドワークを通じてどのよ

うに中国社会を解説するか」という理論的な側面である(二二三頁)。これに基づき、本書は以下のような二部構成となっている。

冒頭に、「はじめに」(西澤治彦・河合洋尚)と「問題提起 中国人類学のフィールドワークを巡る諸問題」(西澤治彦)が据えられている。

第一部「フィールドの現場から」は、「巻頭エッセー 私のフィールドワークを振り返って」(末成道男)と、「インタビュー 末成先生を囲んで」(末成道男/瀬川昌久・桐本東太・西澤治彦)の書き起こし記事、二〇〇〇年代以降に中国各地でフィールドワークをおこなった若手人類学者七名による論考(長沼さやか、阿部朋恒、奈良雅史、小西賢吾、田中孝枝、丹羽朋子、梶丸岳)と、同じく二〇〇〇年代以降に主に中国沿海部でフィールドワークを経験した七名による「座談会 現代中国におけるフィールドワークの実践」(稲澤努、藤野陽平、横田浩一、小林宏至、兼城糸絵、川瀬由高、河合洋尚)の書き起こし記事から構成される。

第二部「フィールドワークと民族誌」

は、「巻頭エッセー 現地調査で学んだこと——エスニック・グループという視点」(田仲一成)と、「インタビュー 田仲先生を囲んで」(田仲一成/瀬川昌久・西澤治彦)の書き起こし記事、そして年代や方法論、手法が多様なフィールドワーカー七名による論考(佐々木衛、田村和彦、川口幸大、河合洋尚、劉正愛、佐藤仁史、西澤治彦)と、「総合討論会 中国におけるフィールドワークと人類学の可能性」(瀬川昌久・聶莉莉・菊池秀明・河合洋尚・西澤治彦)の書き起こし記事から構成される。

最後に「あとがき」(西澤治彦・河合洋尚)で締めくくられている。

五〇〇頁をゆうに超す本書を通読しての率直な感想は、「盛りだくさん」な本だということだ。本書の多角的なコンテンツは、論集がもとも有する「どこからでも読むことができる」という性格を差し引いても、読み手の目的や関心に沿っていかようにも活用することができる。以下、四つの視点から本書を読んで

みたい。

中国は特殊なフィールドなのか

まずは本書の問題意識の一点目にも挙げられている「中国でどのようにフィールドワークを展開するか」という技術的、実践的な参考書としての活用である。告白すると、本書を初めて手に取ったとき、評者は「フィールドワーク前に読みたかった」と思った。本書でも繰り返し述べられているように、中国で外国人が研究活動をおこなうには、さまざまな制約がつきまとう。私事で恐縮だが、二〇〇六〜二〇〇九年に雲南省でおこなった評者のフィールドワークは決して順風満帆とはいえず、一向に取得の見込みがない調査許可証とビザ延長の問題、先達から伝え聞く調査にまつわる数々の「事件簿」に対する恐怖心、四川大地震や北京オリンピック(ともに二〇〇八年)の間接的な影響など、自身の能力の問題以前に、そもそもフィールドワークを実施、継続できるのかという点で不安に思うことが多くあった。そのようなと

きに、本書に収められている経験談の数々を読むことができれば、選択肢を吟味し、可能性を広げるための心強い指針となつただろう。

しかしだからといって、本書は「調査許可証の取り方」や「リスク管理の極意」について具体的に指南しているわけではない。個人の経験はあくまで一事例であるし、そもそもフィールドワークを完全にマニュアル化することは不可能である。ただそうすると、中国に絞ったフィールドワークの手法とは何を指すのだろうか。

本書には、中国では理想的なフィールドワークが叶わず、そのためそのやり方を模索したというエピソードが、特に第一部の各論考に多少なりとも含まれている。ここで参照されている理想とは、マリノフスキーが、一九二〇年代にトロブリАнд諸島で実施したフィールドワークである「マリノフスキー 1967」。これと比較すれば、中国では主に「非都市部での長期滞在」の困難さが際立つ。調査許可証の取得には、さまざまな世情や当

地の受け入れ機関や研究者の立場、彼らとの「関係」(「コネ」)が大きく影響する。つまり、フィールドワーカー個人の資質や努力ではどうにもできない領域が多分に存在するのだ。これが、中国でフィールドワークをおこなう者にとって何らかの「枷」になっているのは事実であるし、本書に収められている試行錯誤の多くはこれに由来する。

一方で、人間関係の構築の仕方(長沼、阿部、丹羽)、センシティブな宗教に関する調査方法の組み立て方(奈良、小西)、都市部での調査の手法(梶丸、田中、河合)、共同調査の可能性(佐々木)などは、中国特有の問題だとも言い切れない。本書でも川口が、フィールドとしての中国の特殊性といったものをはつきりと見いだすことはできなかった(三六五頁)と指摘している。

中国に存在するフィールドワーカーにとつての「枷」を大とみるか小とみるか。本書には中国特有のフィールドワーク論を構築する目論見があったのかもしれない。しかし逆説的ではあるが、評者が得

たことは、「枷」を些細で普遍的なものとして捉え、中国というフィールドを特殊化する必要はないこと、むしろ工夫次第で豊かな民族誌に繋げることができるのだという数々の証明である。

中国でフィールドワークをするのは誰か

二点目に、フィールドワーク本としての意義である。一九九〇年代半ばから人類学のフィールドワークに関する書籍が数多く出版されており「京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科京都大学東南アジア研究所編 2006」上、本書もその関連本として位置づけられよう。これらの多くは、これからフィールドワークをおこなう者を読者として想定している。そして、フィールドワークの実践的な技術を伝えるハウツー本というよりは、フィールドに入るまで、フィールドでの過ごし方、フィールドから帰ってきた民族誌を書くまで、といった経験を伝え、共有する目的のことが多い。

翻って本書だが、このような特徴を備

えつつも、想定する読者に関してはおま
り積極的と言及されていない。実はこれ
が、本書を通読する過程で最も引つか
かった点である。本書は誰に向けたもの
で、本書を手にするのは誰なのだろうか。

読者に関して書かれている部分は二カ
所ある。第一部の「座談会 現代中国に
おけるフィールドワークの実践」の冒頭
で、編者かつ司会の河合が、「この座談
会では、これから中国で長期のフィール
ドワークをする方々を想定し、調査や現
場における困難や技法について各自の
体験から語り合うことを目的としてい
ます」（二〇九頁）と述べている。また
「あとがき」の最後に、「本書が、これか
ら中国を人類学的に研究しようとしてい
る若い人に、あるいはディシプリンを超
えて中国でフィールドワークをしようと
している人に、何らかの参考になれば幸
いである」（五三〇頁）と記されている。
ここから、本書が「これから中国で
フィールドワークをする人」を読者とし
て意識していることが読み取れる。しか
し現実には、中国でフィールドワークを

実施する日本人研究者（大学院生）は二
〇一〇年代以降、減少の途を辿っている
[Kawaguchi 2017: 187-189]。この食い違
いが本書の対象者を分かりにくくさせて
いるのではないだろうか。

そこで可能性として浮かび上がってく
るのが、日本で学ぶ中国人留学生であ
る。本書では、全体を通して、日本人と
して中国を調査する意義（二八頁）にこ
だわっており、執筆者のほとんどは日本
人である。同時に、中国研究者が中国を
研究する意義（二九頁）にも目配りし、
二名のネイティブ・アンソロポジスト
が加わっている。本書をフィールドワー
ク本として位置づける場合、今後はます
ます増えるだろう、日本で学ぶ中国の自
社会人類学者も読者として想定する必要
性が高まるだろう。本書で劉が指摘して
いるとおり、広大な多民族国家である中
国では、人類学者と調査対象者との関係
には主に五つのパターンがある（三九
六頁）。ここに、中国人にとっても純粹
な意味で自社会人類学とは言い難い中国
におけるフィールドワークの面白さと、

多様な方法論を討究できる可能性がある
のではないだろうか。

歴史史料や文献と

どう折り合いをつけるのか

三点目に、問題意識の二つ目に挙げら
れている「フィールドワークを通じてど
のように中国社会を解説するか」という
理論的な視点からの読み方である。本書
では、中国社会を理解する手段としての
フィールドワークを、文化人類学者だけ
に占有されるものとして想定していな
い。そのため、文献研究とフィールド
ワークを結合させたスタイルで研究をお
こなってきた田仲一成のエッセーとイン
タビューに始まる第二部には、歴史学者
によるフィールドワークの経験（佐藤）、
歴史学者と人類学者のフィールドワーク
の比較や、両者の接近を考えながらの論
考（田村、西澤）が含まれている。この
ように特に後半では、フィールドワーク
と民族誌の執筆という人類学者の仕事の
特性と意義を、歴史学との比較によつて
浮かび上げようとする試みが、ま

現れる。それはなぜか。

その背景には、中国が膨大な文字資料の蓄積を有し、人類学者が単独でそれを解読し活用するのは容易ではないこと、「複合社会」である中国にコミュニティ・スタディーズを得意とする文化人類学的フィールドワークが挑むのには限界があるとされてきたことが挙げられる(二二―二二頁)。また、中国本土が国外の研究者に閉ざされていた時代には、歴史学者による文献を手掛かりとして、あるいは歴史学と人類学を接近させて中国研究をおこなってきたという事情も指摘される〔西澤 2006: 18〕。

したがって本書では、フィールドワークのデータを文献でどのように補充するのか、また逆に文献から得た知見をフィールドワークでどう更新するのかについて、人類学者、歴史学者それぞれの取り組みが紹介されており、相互補完的な視野をもってこそ、中国社会をホリスティックに捉えることができるのだとの主張に首肯させられる。

この点が、実は一点目に挙げられてい

る「マリノフスキー流フィールドワークの困難さ」よりも重要な、中国における調査の特徴として指摘できるのではないだろうか。つまり、フィールドワーク中の「枷」よりも、フィールドワーク前の準備段階やフィールドワーク後の民族誌執筆の過程において、歴史史料を参照・利用できる点こそ、中国研究をおこなう者にとつての醍醐味であるといえよう。

しかし、その問題意識が本書の「老壮青」の執筆者にどこまで共有されていたのか、読み取るとは難しかった。歴史人類学の可能性については、総合討論でも議論されているものの、各世代の総意としての見解には少々物足りなさを感じたのが正直なところである。

中国研究か人類学か

第三点目の読み方による「消化不良」の要因は、本書が多世代による著だからこそであろう。そしてそれは角度を変えれば、中国におけるフィールドワークの変遷を辿る読み方を可能にする。それが本書の四点目、かつ最も興味深い読み方

なのではないだろうか。

本書は「老壮青」による大著なだけあり、外国人研究者による調査の幕開けとなる中華民国期、そして中華人民共和国成立以降の本土が閉ざされ香港・台湾での研究が主となった時代に連なる経験が収められている。本書における「老」世代として、「文化人類学がまだ目新しい学問であった」(三八頁)ころから中国研究に取り組んできた末成道男と田仲一成が挙げられる。「壮」世代は一九八〇年代以降に中国に入った研究者、「青」世代は二〇〇〇年代以降にフィールドワークを実施した研究者だと言えよう。本書を通読すると、あらゆる面での世代ごとのゆるやかな推移を読み取ることができる。総合討論でも、三〇余年のタイムスパンのなかで、研究の内容や方法、調査地に入るルート、エスノグラフィの細分化、調査者と被調査者の関係性などが変化していると指摘されている(四七八―四七九頁)。

ここで評者が焦点を当てたいのは、中国研究としての問題意識(四七九頁)の

有無である。それは総合討論の後半で展開されている「中国研究か人類学か」という議論（五一―五二六頁）にも繋がる。

「壮」世代では、中国研究が先にあり、人類学はそのための手段として捉えられる（五一―五五頁）。それに対し「青」世代では、中国研究と人類学のどちらに重点を置くかは二つに割れるが、中国を全体的に理解する目的で人類学をおこなう人はあまり多くない（五一―八頁）。ここに、両者が最も世代間格差を感じているように見受けられる。

「青」世代の評者も、中国研究か人類学かと問われれば、後者の意識がある。ただその理由としては、大衆文化を通じて知る中国がすでに身近にあり、気軽に留学や旅行ができた時代、あるいは大学で文化人類学教育を受けられた時代を過ぎてきたからだという受動的な回答が思いつくのみである。

世代間ギャップは、近年「量産」される民族誌はけつきよく各論である（四八―二頁）という「壮」世代から「青」世代

への苦言としても現れており、そのような各論は果たしてホリスティックな視点をもっているといえるのか、特定のテーマを扱いつつもいかに普遍的な問題を提起するような総論にもついでいけるのか、という問いを投げかける。

とはいえ両者は、「普遍的な問題を明らかにする」ことを研究目的にしている点では一致する。争点となつているのは、フィールドデータを、中国研究に還元するのか、それとも人類学に還元するのか、という点だ。本書で示されている回答は、もはやフリードマンやスキナーの時代のような、チャイニーズ・カルチャーが一つの塊として前提にある時代（五一―九頁）を経て、いま必要なのは、中国研究と人類学、どちらもやらねばならず、その二つのベクトルの交差点をどう考えていくかなのだ（五二―二頁）ということである。

今後、留学先の日本で学ぶ自社会人類学者という次世代を交えて、あるいは新たな協働関係で繋がる日中の共同研究者を通じて、中国研究や中国をテーマとし

た人類学の在り方も、さらに変化してくだろう。本書の最大の魅力は、このような世代間ギャップから、研究の在り方が常に変化の過程にあることを示し、それを三〇余年の節目で提示した点であるといえよう。そういう意味で本書は、中国フィールドワーク史に刻まれる本として読み継がれるものになるだろう。

以上、四つの視点から本書を解説してきた。フィールドワークとは、異なる感性を持つ人と人との出会いが紡ぎだす営みであり、それをおこなった人の数だけ喜怒哀楽に満ちた物語がある。本書の「盛りだくさん」な内容は、中国でのフィールドワーク経験前・後問わずあらゆる人に対し、多くの共感や問いを生む「贅沢」な仕上がりになっていると言える。

参考文献

Kawaguchi, Yukihiko 2017 "For whom and by whom? Internationalization and globalization of Japanese anthropology of China."

Japanese Review of Cultural Anthropology,
18 (2), pp. 185-191.

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研
究研究科京都大学東南アジア研究所編

2006 『京大式フィールドワーク入門』

N T T 出版

西澤治彦 2006 「序論 中国文化人類学の

歩み」瀬川昌久・西澤治彦編訳『中国文
化人類学リーディングス』風響社、七―

三四頁

マリノフスキー、B. 1967 「西太平洋の遠

洋航海者」寺田和夫・増田義郎抄訳、泉
靖一編『世界の名著59』中央公論社、五

五―三四二頁